

ともにいのちかがやく世界へ

大悲

元本願寺派総長
題字：蓮 清 典 師

(第59号)
2018. 1. 1

昌 平 寺
昌平寺門信徒会

〒359-0036 所沢市旭町22-8 電話 (04) 2994-8887



正福寺山門

平成二十九年 度

昌平寺行事御案内

一、修正会(元旦会)

1月1日(祝・月)

開門 午前7時

勤行 午前8時

昌平寺住職 遠山久敬

二、春季彼岸会 3月21日(祝・水)

勤行 午後2時

講演 午後3時

駒澤大学名誉教授 田上太秀師

三、春まつり 4月8日(日)

音楽礼拝他 午前11時

四、合同墓地追悼法要(第一墓苑)

5月13日(日)

勤行・法話 午前11時

五、門信徒総会 6月3日(日)

六、本堂預骨室至盂蘭盆会(第一本堂)

7月22日(日)

七、盂蘭盆会 7月29日(日)

八、武蔵野墓苑盂蘭盆会 8月5日(日)

九、秋季彼岸会 9月23日(祝・日)

十、開基住職小畑俊哲忌

十一、報恩講 11月2日(金)

十二、成道会の集い 12月1日(土)

12月2日(日)

12月7日(金)

12月7日(金)

新年法話

悲田のころ



昌平寺住職 遠山久敬

さて、冒頭の歌は、聖徳太子が奈良の片岡山に遊行（仏道の修行法としての行道）に出かけた折、道中で飢えて寒がつている旅人に気付き、下馬し、語りかけてその人物の徳とあわれさを感じ、食物を与え、太子ご自身を衣を与えた時の歌です。

【歌の訳】

しなてる 片岡山に
飯に餓て 臥せる
その田人（旅人）あはれ
親なしに 汝生りけめや
さす竹の 君はや無き
飯に餓て 臥せる
その田人あはれ

「日本書紀」

推古二十二年十二月一日

門信徒の皆様 新年明けましておめでとうございます。

また、日頃は、昌平寺の行事等にご協力、ご参加いただきありがとうございます。

そして、この物語には後段があります。「翌日、太子が使者を遣わしてその人を見に行かせたところ、

「しなてる」は片岡山にかかる枕詞）片岡山で食べ物に飢えて倒れている旅人はかわいそう。親もなく、お前は生まれたのか、「さすたけの」は君の枕詞）仕える君主はいないのか、優しい恋人はいないのか、食べ物に飢えて、倒れている旅人はかわいそうだ。」

そして、この物語には後段があります。

「翌日、太子が使者を遣わしてその人を見に行かせたところ、

使者は戻って飢者がすでに死んでいたことを告げた。太子は大いに悲しんで、飢人の遺体をその場所に埋葬して墓を固く封じさせた。数日後に太子は、近習の者を召して「過日埋葬した人は普通の人ではない。きっと真人（ひじり）にらがない」と語り、墓を見に行かせた。使いが戻って来て「墓を動かした様子はありませんでした。棺を開いてみると屍も骨もありませんでした。ただ棺の上に衣服だけが残ったんで置いてあります」と告げた。太子は再び使者を遣わして、自分がかつて与えたその衣服を持ち帰らせ、以前のように身に着けた。人々は大変不思議に思い、「聖は聖を知るといふのは、真実だったのだ」と語って、ますます太子を畏敬した。」

【片岡山伝説】より】

私は、この物語で、「太子が悲しんだ」とあるところが気になりました。食物を与えた当日

は、遊行中なのでしっかりと面倒が見られず、対応が翌日になり命を救えなかつたこと。また、当日にすっかりした家に預かれれば、体力が回復したかもしれないと、悔んだに違いありません。太子はその空しい思いを具現化すべく次の施設を造られた。

仏教の慈悲の思想に基づき貧しい人や孤児・老人を救うための悲田院（現在の社会福祉施設）薬草を栽培し、怪我や病気で苦しむ人を救うための施薬院（同薬局）療病院（同病院）さらに敬田院（同寺院）を造られた。

私たちも、いろいろな場面で、いろいろな縁に遭います。が、何もできずに通り過ぎることや、中途半端に手を出すこともあり。でも、念仏は無碍の一道、いつでも遊行の心で今年からは、悔いが残らないようにしたいと思えます。皆様もどうぞ！
*遊行（ゆうこう）と読む場合は、単なる散歩。

孟蘭盆會法話

大悲無倦常照我々おかげさまの心で

浄土真宗本願寺派布教使 赤川 浄友



昌平寺さんでの初めてのご縁です。赤川浄友です。ああ言えばジョーユー？ではなく、昌平寺さん開基ご住職さまのご友人、故花山勝友先生の弟子です。花山先生にご法名をいただき、戸籍上も「浄友」に変えました。この度は、大変有り難いご縁をいただきました。

私は「笑い療法士」という資格を持っていて、「一日五回笑いましょう」といつも言っていないのです。日本人は、五回笑ってないのです。特に、男性！だ

から、平均寿命が女性より短いのです。(笑)「笑う門には福来る」です。お寺で笑って元気になつて帰ってください。

さて、孟蘭盆はウランバナというインドの言葉の音写文字です。意識は倒懸です。さかさまに吊り下げられたような苦しみであります。先生もいいます。見方がさかさまだったと自らを見つめなおすことです。私たちは、「オレがオレが」と自分中心の価値観で、損か得か、好きか嫌い、儲かるか儲からないかと生きています。しかし、仏教の教えは、見方が逆だよ、気付けよ、目覚めよ、身の程知れよ、私がここにいますよ、任せよと、仏さまが喚びます。

ここで、例話を紹介します。

『卒業生からの手紙』です。卒業式の日帰宅し、両親を前に卒業証書を置き、「ありがとうございませぬ」とお礼を言ったのです。その時、父親が涙を浮かべて「ご苦労じゃったね」と言ってくれた。それを聞いたこの子は「この卒業証書は私が勉強して努力をしてもらつたと思つていたが、間違えだつた。これは両親がもたらすべきものだった」と気づき、両親のご恩に目覚めるのです。「倒見」です。それを宗教用語で「回心(えしん)」と言い、心が入れ替わるのです。実はこの「ご苦労じゃったね」が、お念仏なのです。仏さまからの呼びかけは、いつでもどこでも、私たちに問いかけられていたのです。生活の中にお念仏はあつたのです。

最後に、尊敬するお医者さん、ホスピスの第一人者柏木哲夫先生のお話しで終わります。「老人のうつ病には不眠と食欲不振はつきものである。投薬とカウンセリングで症状が改善し始め

たとき、Aさんは、「おかげさまでまだ食欲出ませんが、眠れるようになりませぬ」と感謝をおっしゃる。Bさんは「眠れるようにはなりませぬが、まだ食欲が出ませぬ」と不満げにおっしゃる。Bさんはなかなか良くならないがAさんはどんどん良くなる。「まだ食欲が出ない」と否定的な言い方で終わると「眠れるようになった」と肯定的な言い方で終わることの差である。多くの看取りをしてきた立場で言えるとしたら、「周囲に『感謝』して生きてきた人は、死ぬ際も『感謝』して死ねる。その人が周囲に対しどれだけ『感謝』をして生きてきたかが、その人の最後のありようを決めるのではない」と精神科医の柏木先生はおっしゃいます。おかげさまでと往(ゆ)きて生きたいものです。



秋季彼岸会法話

往くも還るも阿弥陀如来のはたらき

東京教区埼玉組組長 願誓寺住職 増井 信行



私たちがいただいているみ教えは、阿弥陀如来の力100%の成仏道です。阿弥陀如来は私たちが仏になることの出来る功德を全て南無阿弥陀仏のお名号に込めて私たちに回向（くたさる）してくださいます。私が念仏を聞ける、称えられるということは阿弥陀如来の力・功德が私に届いているということですから。南無阿弥陀仏のお名号は「おれにまかせとけ、引き受けてるよ」の阿弥陀如来のみ声です。蓮如上人は御文章に「それ、南無阿弥陀仏と申す文字は、その

数わずかに六字なれば、さのみ機能のあるべきとおぼえざるにこの六字の名号のうちには無上甚深の功德利益の広大なること、さらにそのきわまりなきものなり」（五帖十三通）とお示しくださっています。

歎異抄には「弥陀の本願には老少・善悪のひとをえらばれず」（二条）とあり、御消息には「臨終の善悪をば申さず」（十六通）とあります。阿弥陀如来は私の人生の内容を問うこともなく、私の死に様を問うこともありません。これほど安心で頼もしい言葉はありません。「おれにまかせとけ、引き受けてるよ」の南無阿弥陀仏だけであります。世間では「長寿で大往生だつたね」「まだ若くて無念だったろうね」などの声を聞くことがあります。念仏者において長

寿だから大往生、若かったから無念の死という思いはありません。皆、それぞれの人生を全うして、このたび阿弥陀如来のもとに往かれ、仏に成った、ということですが、大事な人とのお別れはつらく悲しいことですが、「つらいけれど安心だ」「さみしいけれど安心だ」といただきましたね。

阿弥陀如来のお力で浄土に往き、仏と成らせていただくことを「往相」と言います。しかし往つたら往きつ放してはなりません。この世界に還ってくる。それを「還相」と言います。仏の神通力を駆使し、あらゆる手段を用いて、すべての人に仏縁を結ばせるべくはたらくと言われています。こんな話を聞きました。ウグイスの鳴き声を聞いてお寺に行つた。「ホーホケキョ」が「法を聞けよ」と聞こえたんですね。仏がウグイスに姿を変えて現れたのかもしれませんね。

正信偈には「遊煩惱林現神通、

入生死園示応化」とあります。最後に1989年に発刊された『癌告知のあとで』（鈴木章子著1941〜1988）の中のお念仏という詩をご紹介します。終わりにいたします。

お念仏いただいで、こんな嬉しい身にさせてもらいました。浄土に先に還られました。父母のおかげでございます。私もまた、近く父母と同じく、愛する愛する、子供たちの、お父さんの、南無阿弥陀仏になって、この喜びの中に、導く身にさせていただけますこと、無上の喜びです。ナムアマミダブツナムアマミダブツ、どうぞ、どうぞ、お念仏の相続、どうぞ、どうぞ、お念仏ひとつでございます。



新年のご挨拶



門信徒会会長 浅上勝敏

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

昨年は、門信徒会創立二十周年の節目の年を越して新しいスタートの年でありましたが、二月八日、西本願寺において執り行われた第四百四十八回住職補任式に遠山住職が臨まれました。これを受けて、六月四日、昌平寺の門信徒総会に併せて住職継職奉告法要が盛大に挙行されました。

昌平寺様にとりましても、開山以来の大事事となるなど、大変緊張した年ではありましたが、坊守様、御住職及び御法中の皆

様並びに寺務所の皆様、そして、会員の皆様の暖かいご指導ご鞭撻により役員一同門信徒会の運営に携わって参りました。行き届かないところが多々あったとは思いますが、多くの皆様のご支援、ご協力に心から感謝申し上げます。

昌平寺では、ここ二、三年正月元旦に修正会が執り行われるようになりました。これも遠山住職の出来るだけ本山に倣いたいとの考えがあつてのことと思ひます。修正会は新しい一年をお念仏とともに生きる決意を新たにするため、仏祖、宗祖にご挨拶する法要であります。本願寺では、阿弥陀堂で修正会その後御影堂に移つて元旦会が執り行われています。昌平寺においては修正会であり元旦会でもあるということでしょうか。修正会が終わるとその場でお酒が

振る舞われます。この屠蘇をいただくことによつて心あらたまり、正月らしくうれしい気分になるのはたまりません。宗祖親鸞聖人もきつと大目に見てくださること勝手に煩惱具足の凡夫は思います。

親鸞聖人も、その昔、「酒はこれ、忘憂（ぼうゆう）の名あり。これをすすめて、わらうほどになぐさめて、さるべし」（『口伝鈔』覚如上人著）とおっしゃつており、酒の効能を語つておられます。酒には憂い、辛さを忘れさせてくれる、という効能がある。どうしようもないほどに落ち込んでしまつて、悲しんでいる人がいたら、酒を勧めて、その人が笑うように慰めてやるのがよい。ということでしょうか。また、常陸から京都へ帰るときの旅立ちに際して、聖人から教えを受けた人たちが別れを惜しんでそれぞれ酒を持参したが、聖人はその酒を大樽に移して自ら柄杓でかき混ぜ、一味にして笑いながら吞まれた。惜別

の情以上に出会えたことの喜びがその場を包んだということですね。（『親鸞物語』西原祐治著）
仏教で飲酒を「戒律」として禁じているのは、「酒が人間によこしまでみだらなことを考えさせ、行動させる原因になるから」ということで、だからといって全面否定するものでもないのではないかと。法然上人も「この世のならひ」と『百四十五箇条問答』の中でおっしゃつておられます。親鸞聖人もそのようにお思ひになつておられるのではないかと拝察いたします。
皆様も是非、初詣は昌平寺と定め、本堂を埋め尽くしてお念仏を唱え、めでたい屠蘇をいただきます。今年も役員一同一丸となつて頑張りますので、どうぞ宜しくご支援、ご協力をお願い申し上げます。
終わりにりましたが、新年にあたり会員の皆様のますますのご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げます。

昌平寺
武蔵野墓苑・孟蘭盆会法要
縄田 脩

昌平寺の孟蘭盆会は、本堂・孟蘭盆会（第一本堂）、預骨室・孟蘭盆会（第一本堂）、武蔵野墓苑・孟蘭盆会（第一墓苑内無量壽堂）の三回が行われます。

本堂・孟蘭盆会は毎年大凡七月末の日曜日に行われ、これまでの経緯を見ますと、一週前に預骨室の、一週後に武蔵野墓苑の孟蘭盆



会が行われることが多い。

孟蘭盆会の式次第は、会場に拘わらず同じで、三奉請、表白、読経、佛歌「み佛に抱かれて」の順で行われ、続いて法話があり、恩徳讀で締めます。法話は本堂・孟蘭盆会では他寺の僧侶を招いて行います。ぜひこの機会に沢山の方の参列、ご聴聞をお待ちしています。武蔵野墓苑では、住職がお話されます。

武蔵野墓苑の孟蘭盆会は、毎年十時から十二時からの二回行われます。永代供養塔、墓苑にご縁の方々、午前の部で五百人位、午後の部で四百人位の門徒が参列



されます。

因みに、預骨室・孟蘭盆会は、十一時、十三時の二回行われ、併せて三百人位、本堂の孟蘭盆会には百人位の方が参列されます。

法要は左の写真の様に第一墓苑の無量壽堂で行われます。

無量壽堂の前に、上の写真の様に大きなテントを張り会場とします。猛暑の時期ですが、風が通りやすく、また、冷茶、団扇、ミストシャワーなどが準備され、暑さを凌げる様になっています。



会場へは別館から二台、航空公園駅東口から三台のシャトルバスが参列者を墓苑まで送り迎えします。

墓苑の入り口には、業者の方がお墓に供えるお花やお線香などを販売しているのも便利です。

焼香台は二段目の写真の様に本堂の前に設けられます。

昨年の孟蘭盆会も、参列の方々と一緒に正信偈を唱和し、住職の法話を聴聞し、最後にオルガンに合わせて恩徳讀を参列者全員で合唱し、孟蘭盆会を終わりました。

南無阿弥陀仏



研修の旅(一日目)

研修と観光の旅をして

岡屋 忠利



十月十日朝願つてもない晴天のもと、その幸運に感謝しつつバスに乗り込み出発しました。

遠山住職と門信徒会会長浅上さんを筆頭に小畑坊守・和藤元

住職代務・事務職としてお世話になって南里さん・門信徒

代表役員の久万さん・植原さんなどを加えて総勢二十八人の旅

になりました。唯、いつまでもお若い姿に、やらねばという前

向きのやる気を頂ける嶋津さんが体調のご都合で欠けた事は残念

でした。バスは途中談合坂SAで小休止して、予定通り富士

吉田市にある浄土真宗本願寺派正福寺に到着しました。バスま

でわざわざ出向いて迎えて下さった住職に従って本堂に入りま

した。予想をはるかに超えた荘重な荘厳の中心におわす阿弥陀

如来に合掌礼拝し、遠山住職の讃仏偈に唱和読経し研修に入り

ました。私達のために同席された前住職から、遠山住職とは従兄弟であることの自己紹介にはじまり正福寺の歴史・沿革についてのご説明を頂きました。

正福寺は最初西暦八百七年に弘法大師空海がこの地に入られ

た時、佛教を習得するための道場の一つとして設けられた草庵

に始まっていて真言宗に属していた事。千二百二十八年に親鸞

聖人が新潟から茨城方面へ向かわれた途中この地に入られた時、

時の住職が聖人の人格と念佛の教えの素晴らしさに感動され、

ご本尊を賜って改宗されあらたに浄土真宗のお寺として山を下

りて、この地に本堂を建てて正福寺と改号された事。元々この

地は富士山の活発な火山活動でそれまで湖底であったところが

隆起して肥沃な平地となつて人が住み始め人間社会が構成され

てきた事。その後、鎌倉時代を経て室町時代に蓮如上人が当地に入られて活動された頃、この地の守護職であった遠山伊豆守重政という方が聖人に帰依され正福寺の十三代住職になられた事。などなどを承りました。続いて庫裏に案内され静かに茶菓の接待を頂きました。そののち

庭内の経堂に移り、輪転蔵とその中に取りめられている二百五十年前の五千七百巻に及ぶ経典を

拝見しました。その後山門と鐘突堂が一体になった姿を眺めながら正福寺での研修を終えまし

た。お話を伺った前住職他の皆様のお見送りを頂きながらバス

は北口本宮富士浅間神社に向かい参拝しました。鬱蒼とした境内の社前に際立つた二本の御神

木からも悠久の歴史の重みを強く感じました。参拝を終えてバス

に戻る途中に店を張る浅間茶屋で昼食を取りました。全員店

自慢のおいしい郷土料理に舌鼓を打ち「忍野八海」へ向かいま

した。

再会した忍野八海の郷の様子はずっかり一変していました。ゆつたりと美しい富士山の景色を楽しめる場所はもうここにはありませんでした。外国からの観光客でにぎわう通りを避けて、昔ながらの綺麗な湧水の流れに沿ってバスまでの散策を楽しみました。

私達を乗せたバスは今夜の宿泊先の石和温泉石和常磐ホテルへと向かい全員元気に到着しました。

楽しみの一つである夜の宴会も終え初日のスケジュールで研修したことを思い浮かべながら眠りの床に就きました。

正福寺で頂いた資料の中に、お寺は私達の生き方を確かにする所であり、そのために教えが

説かれている。「老」「病」「死」は「生」という事実がない限り

あり得ないもので、その事実をはっきり確認することから佛教

は始まるとありました。味わい深い言葉としてご紹介し、私の

稿を終わります。

合掌

研修の旅(二日目) 秋の研修・親睦旅行に参加して

池田 新八郎



「結ぶ縁から広がる縁へ」という言葉がありますが、退社後

仏教に親しみ、心の糧として生きていきたいと考えていました。が、なかなか叶わず今日に至っていました。今年から仏縁あつたのか「大悲」の編集、勉強会等に参加させていただき、さらに今回初めて門信徒会「秋の研修旅行」に参加させていただきました。

初日十月十日、正福寺の拝観、富士浅間神社、忍野八海見学等の日程を終え石和温泉ホテルに宿泊。翌十一日九時頃、前日の懇親会のほろ酔いが冷めやらぬ中、甲斐善光寺を始めとする見学に向いました。この日も好天に恵まれ、バスの中は皆さん和気あいあいとくつろがれています。私も皆さんが暖かく声をかけてくださり、初参加の緊張もほぐれ、正面に富士山を仰ぎ

見ながら、快い気分です。二日目の見学コースに向いました。

まず甲斐善光寺を参拝。川中島の合戦の折に武田信玄が信濃善光寺の焼失を恐れ、御本尊如来像始め、諸仏寺宝類を奉遷したことから始まったと言われています。壮大な敷地に金堂、山門、阿弥陀如来像等さまざまな重要文化財、指定文化財が残されていて歴史の重みを感じさせられました。

特に目を引いたのは、日本一といわれる鳴き龍とお戒壇巡りでした。鳴き龍は天井に巨大な二頭の龍が描かれ、廊下の部分のみ吊り天井になっていて、手を叩くと反響現象で共鳴が起き、まるで龍が鳴いているように聞こえます。また心の字を象るといわれるお戒壇巡りは、真つ暗な地下通路を歩き、鍵に触れる事により、御本尊とご縁が結ばれ

ると言われています。善光寺が今日まで脈々と生き続けているのは、庶民の篤い信仰があったからだと感じさせられました。

その後桔梗屋信玄餅工場、勝沼紅玉園を見学、昼食は「ぶどうの章」で郷土料理「宝刀御膳」をいただきました。武田信玄が刀で食材を切ったことから名付けられたそうで、甲斐の味をたつぷり堪能いたしました。

午後は最後の目的地リニア見学センターを見学。リニア中央新幹線は時速五百キロ、新幹線の二倍の速さで、東京と大阪をわずか一時間で結ぶ世界最速の新幹線といわれています。リニア開発の歴史や磁気浮上走行が体験できるコーナー、リニアジオラマが見学できるコーナーなど様々な趣向が凝らされていて驚く事ばかり。一時間いてもリニアの走行シーンを見られない事があるようですが、我々がいる間は七回も見ることができました。五百キロのスピードを目のあたりにし、何回もシャッター

を押しましたが結局写真を撮ることは出来ませんでした。二〇二七年完成予定だそうです。元気なうちに乗ってみたいものと実感しています。

午後二時半頃、リニア見学センターを後にバスは一路所沢へ。帰りには皆さんリラックス、バスの中でお菓子類、お酒も用意されていて、ビンゴを楽しみました。縁あつてこのような旅行に参加させていただき、心に残る研修、懇親バス旅行になりました。



甲斐善光寺山門

新倉山正福寺



に由来するものです。

現在向拝にあるこの額は、弘法大師が甲斐の国に幾つかの道場を定められた、新倉・阿の山の草庵「富北院」



写真の本堂（市文化財）は第十六代西園が現在地に移し、四百年前、元和元年（二六二二）に完成しました。内陣は桃山時代の様式を踏襲、極彩色の見事なものです。昭和二十五年葺葺きを銅板葺に変えられました。



経堂・八角輪転蔵（市文化財）「一音蔵」は明和四年（一七六七）に造られ、手で軽く回せるお経を収める沢山の引き出しのある、今風に云えば八角形のお経篋筒と云いましょうか。納めてある

一切経は、一六八三年黄檗宗鉄眼禅師が十七年かけて造った版木で刷ったものです。この版木は現在でも使われています。



ご本尊の阿弥陀仏は、金びかではありませんが、直立像で優しい顔立ちが印象的でした。



山門は石段を登って入る様になっていきます。（表紙写真参

照）。左の写真で二階に梵鐘が吊られているのが見えるでしょうか。



お庭の親鸞像は笠を手に持つお姿で、私達を見守って下さる感じがしました。

近くには浄土真宗本願寺派の寶松山大正寺、聖徳山福源寺の二寺があり、それぞれが有形文化財を持つ古刹です。お近くに行かれる機会がありましたらお参りしていただくのも何かのご縁です。

（繩田 記）



経蔵で前住職



正福寺本堂



正福寺
遠山章信住職



250年前の経本



北口本宮
富士浅間神社



忍野八海



懇親会

平成29年10月10日～11日
写真で綴る、
秋の研修バス旅行の思い出



紅玉園の葡萄棚



秋天に聳える甲斐善光寺



リニア見学センター
2017年 10月 11日



時速 500km リニアモーターカー

つれづれ

毎月第三火曜日に行われてい
る昌平寺の定例法話会。

九月は十九日、講師は山崎誠
敬師でした。

現世利益和讃のおあじわいの
最後に昨年一月に亡くなった松
方弘樹氏の葬儀の折のひとこま
のお話があり、インタビュアー
に応えたある俳優の言葉が紹介さ
れました。

「いずれは自分たちらも行く道
です。でももう少しこちら側で
仕事をしていくの身を見守っ
てほしい。そしていずれ私が彼
のところへ行った折には、先輩
としていろいろなところを案内
して欲しいと思います」という
ものでした。

そしてその四日後、お寺の行
事「秋の彼岸会」を迎えました。
法要の後ご法話をいただいた
のは、深谷市願誓寺ご住職の増
井信行師。「阿弥陀さまのおは
たらき」をテーマにしたご法話

のあと、次のおはなしで締めら
れました。

「東日本大震災の直前にはニ
ュージールランド大地震がありま
した。英語の勉強のため留学し
たばかりの日本人の学生が多数
亡くなりました。

地震から数日後、まだ発見さ
れていない娘さんを探すため、
ご両親が現地に行きました。空
港でのインタビュアーに父親が気
丈に答えていたのがとても印象
に残りました。娘さんの死を覚
悟している中でのお話です。

「娘に言っておあげたい。お前
の人生は短かったけれど、素晴
らしい人生だったよ」と。
決して「無念だったろうに」
という言葉は出ませんでした。
悲しいご縁ではあつたけれど、
短かったかもしれないけれど、
精一杯生き抜いた人生です。

素晴らしいお父さんだと思っ
ました。
ご講師お二人ともそれぞれの
方々について、浄土真宗の御門

徒であるのか定かではないと申
されました。

しかし松方弘樹氏の盟友につ
いては、なんと温かな思いを感
じさせられたことだろうと……
そして娘さんに先立たれた父
上に於いては、まさに浄土真宗
の教えそのものに導かれる思い
が致します。

亡くなられた方への畏敬の心
そしてお浄土で必ず会えるとい
う念い、九月の短い間に二回も
同じようなご法話を伺いました。
近しい方との悲しい別れも、
亡くなった方がお念仏となつて
残つたものを救つてくださり、
ほとけさまと私たちのつながり
が新たに始まつていく、という
浄土真宗のお導きを強く強く感
じさせられました。 合掌

|| 日記 ||

昌平寺本館ロビー突き当りの和
室は、平素ご門徒の法事の折のお
斎・昌平寺俳句会・茶話会等で利
用されていますが、このたび椅子
席に模様替えされました。十一月

二日の俊哲忌法要のあと、お寺の
お心づかいでお部屋のお披露目が
とり行われました。ゆつたりと腰
かけられた皆さま方の明るいお顔
が印象的でした。

このお部屋では写経も学びます。
一月の写経は、十六日(火)です。
皆さまどうぞご参加ください。

定例法話会

第三火曜日

十時〜十二時

講師は昌平寺僧侶、他講師
午後一時から、和室で茶話
会を行います。

(注)一月・七月・八月・十二月
は休会と致します

修正会のご案内

平成三十年一月一日(月)

開門 午前七時

勤行 午前八時

法要後、参加者全員で本堂に
て、流盃の儀(お屠蘇)を行
い、新年を祝います。皆様の
ご参加をお待ちしています。

昌平寺俳句



平成二十九年十月二十四日

深見けん二選

弥陀ヶ原廻ってつきしるのこづち

浅上 勝敏

一箸を中高に盛り菊脍

浅上 寿子

お隣も家族連れなり秋彼岸

新井 雪江

日々読みし母の経本秋彼岸

池田新八郎

秋風や五重塔を水映す

緒方 初子

ばさばさと甲斐善光寺松手入

香月えいじ

亡き人に菊を手向けて独り言

木谷 英子

ひと抱え剪りても余り庭の菊

久保田よしみ

町中に我を呼ぶ声秋の風

小泉 洋一

降りながら日はきらきらと水の秋

芝 高子

欠かされぬ月命日の菊を買ふ

志摩 角美

賞を得し鉢をかこみて菊の友

鈴木すぐる

菊脍夫婦揃ひの国訛り

鈴木 征子

忽ちに晴れ渡りたる菊畑

田井地智子

虫の音の繁き早朝散歩かな

高橋 敏子

古書市を巡りしあとの菊花展

永井 潮

本堂の太き柱や秋の風

永岡美砂子

秋空を残し黒々甲斐の山

縄田をさむ

湯宿出て歩く町中秋の風

福田 敏子

深閑と永平寺領風の秋

馬越やす子

菊溢れ蜜柑を山と俊哲忌

深見けん二

昌平寺俳句会御案内

毎月第四火曜日

締切

十時

場所

本館和室

句数

七句

どなたでもご参加いただけます。

まずお寺へ

皆様方は、御家庭の御仏壇に朝に夕にお手を合わせていらつしやいますね。

本堂は家庭の仏壇の延長線にあるものです。俱に心のよりどころとしてお気軽に御参りください。昌平寺は皆様のお寺です。お葬儀の相談、お墓、仏塔の購入、お遺骨の一時預かり、ご法要の相談、ご仏壇の購入、ご本尊入仏慶讃法要等々仏事の事なら何なりと迷わずにご相談ください。また、昌平寺では、年一度皆様方にお送りしております年間行事表、大悲の冒頭にも掲載してありますように年間を通して十回の仏行事があります。ご家族お揃いでお参りください。本願寺でも有名な先生方をお招きしての御講演、定例法話会もありますので、ご聴聞ください。更に月例門信徒会によるお楽しみ茶話会、昌平寺春祭り、年一回ですが門信徒会の研修親睦

旅行等の行事もあります。

ご参加ください。お持ちしております。

最近、テレビ、新聞、週刊誌等で話題になっております葬儀において、納得のいかない請求が多々発生し、トラブルとなることしばしば見受けられるようです。

葬儀業者の当初の見積り金額、ネット等で調べた金額と大幅に請求金額が違うこともあると聞いております。

やり直しのきかない葬儀ですから各自が細かい部分まで十分にご確認され納得されたうえに契約いただければと存じます。

お葬儀の契約についての苦情の増加は、葬祭業の営業に許認可制がなく新規参入がしやすいためという背景があるほか、突然訪れる身内の不幸に動転して、業者のペースで契約してしまうことが多いようです。

こうしたことから、ご葬儀は出来るだけご本人が生前中にご家族と話し合いの上、お葬儀の予

算、ご参列者予定人数・お知らせする方々の住所、氏名、ご家庭の宗派、遺影のお写真、斎場等についてご家族と相談してあらかじめきめておくことご安心いただけると存じます。

お葬儀については、まず昌平寺にご相談ください。信頼できる葬祭業者を紹介させていただきます。

当昌平寺では葬祭斎場二ヶ所、法事本堂二ヶ所を備え、ロビー、駐車場も整備してご来寺のお客様にご不便のないよう努めております。

預骨室のご利用、墓地については、墓苑をお持ちでない方には、当寺では仏塔（永代供養付き合同墓所）、また残りは少なくありませんが、墓地のご用意もありませんし、その間のお預かりも出来ませんのでご利用ください。

なお、当昌平寺では、従来どおり門信徒の方々にご寄進をお願いすることは一切ございませんのでご安心ください。

合掌

編集後記

明けましてお目出とうございます。会員の皆様、明るい新年を迎えられたこととお喜び申しあげます。

昨年は世の中、いろいろのことがありました。とてもここでは書き切れません。国内でもまさかの解散総選挙で、「小池希望の党」が結成され、民進党が分裂し、安倍降ろしの大合唱のなかで、自民・公明与党が政権を維持しました。本山では専如第二十五代門主の伝灯奉告法要が終わり、新しい本山が期待されます。昌平寺では、遠山住職が第三代目住職に就任され、以来、門信徒に広く開かれたこれらの昌平寺を目指し日夜勤めておられます。会報もその意に沿って成長したいと思っております。会員の皆様のご協力、ご指導を宜しくお願い致します。

脩

Topics

